

出版者丹羽圭介の視点による 山本覚馬著英文『京都とその近郊の 名所案内』(1873) の詳細な制作背景

千 代 間 泉

【要旨】 日本初の英文京都ガイドブックの出版者、丹羽圭介の言葉を新出史料である丹羽の講演録やインタビューから、ガイドブック制作部分に関連した部分のみを取り出し、それらの新情報から詳細な制作背景を考察した。その結果、発行元である集書院、京都府の雇い外国人教師であるレーマンとヂュリーの指導、山本八重と女紅場の生徒たちの印刷作業、山本と丹羽の師弟関係など、山本覚馬の強固な人的ネットワークが、ガイドブック制作に深く関与したことがわかった。また、丹羽の幼少から20代までを、丹羽が受けたインタビューと、家族に伝わるエピソードを含めてまとめた。

【キーワード】 丹羽圭介、山本覚馬、レーマン、ヂュリー、山本八重、*Celebrated Places in Kiyoto*、*The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto*

1. はじめに

丹羽圭介は、日本初の英文京都ガイドブックである、山本覚馬著 *Celebrated Places in Kiyoto and the Surrounding Countries for the Foreign Visitors, Translated into the English by K. Yamamoto. Kiyoto: Published by Niwa: the Sixth Year of Meiji: 1873* (以下覚馬名所案内¹⁾) の制作者・出版者である。覚馬名所案内は、当時、最新式のプロシア製印刷機を使い、絵のように美しい銅版画を貼り、英文で京都名所を紹介するという、日本の文明開化を象徴する、京都博覧会の公式「外国人おもてなしツール」であった。そして、京都博覧会会場において

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景「丹羽氏自らの手で印刷して売ったのが非常に好評を博した(京都府教育会、1940: 390)」とあるように、丹羽の覚馬名所案内への熱意が見られる。

筆者は、拙論(2020)において、覚馬名所案内の制作背景と改訂について述べたが、その後丹羽に重点を置き、制作背景の調査を継続した。覚馬名所案内を世に出すためには、丹羽と少人数の制作者たちの他にも、何らかの協力体制があったと考えた。山本の実際の関与、他の指導者の有無、発行元、名所選定、日本語、英語訳の作成、実際の活版印刷の様子など、多岐にわたって研究の余地がある。本調査において、京都府立京都学・歴彩館所蔵の、丹羽圭介講演録(1896か)としてまとめられた、「博覧会の沿革丹羽圭介講演」と「京都と博覧会丹羽圭介氏談」を得た。また、丹羽の曾孫である丹羽章氏に面談の機会をいただき、丹羽章氏が丹羽の思い出をまとめた、『三橋写真』(2010)、並びに、丹羽が受けたインタビュー(丸尾長顕著(1967)『イヴの喫煙室』「圭介翁聞き書」)、*A Directory of Kyoto and Its Traders* (1913)(以下ディレクトリ)の写しの提供を受けた。ディレクトリについては、別稿にする予定である。

これらの新出史料を検討し、丹羽の言葉による、覚馬名所案内の制作背景から得た新情報を確認した。また10代で覚馬名所案内制作を成し遂げた、丹羽の幼少期から覚馬名所案内制作時までの人物像を、丹羽の視点から掘り下げることは興味深く、本研究の研究には必要であろう。

調査の結果、山本の関わりは、山本の京都国際化戦略のネットワークである、ルドルフ・レーマン(Rudolf Lehmann)、レオン・デュリー(Léon Dury)、日本側からは、妹山本八重を通して、強く示唆された。特に今回の調査において、レオン・デュリーの名が制作の指導者として新出した。また、新英学校及女紅場の女子生徒たちが、活版印刷の作業に従事したことも新情報である。さらに若き日の丹羽が、師匠山本覚馬の薫陶を受け良く応えて、この制作から発行までのプロジェクトをやり遂げた様子が浮き彫りになった。山本の指導者としての姿は丹羽のその後の活躍に現れた、と考察する。

本稿では、外国人名はカタカナ表記とし、始めは()内にアルファベット表記する。数字は基本的にローマ数字とする。年号は西暦で表記し、必要のある時には西暦(和暦)年とする。丹羽の年齢は、数え年である。文献は一部現代仮名遣いとした。

2. 先行文献

覚馬名所案内の制作についての先行文献は、青山霞村『改版増補山本覚馬伝』の記述を基本としているものが多い。また先行文献は、制作の改版、体裁、時代背景、銅版画、英文、内容など色々な方面から多岐にわたって研究されている。

銅版画の違いを含む覚馬名所案内の改版については、小嶋正亮（2019）の論考に詳しい。また千代間（2020）には、改版における文章内の内容の違いと情報更新がある。

覚馬名所案内の母体であった京都博覧会の時代背景については、工藤泰子（2008）の論考に詳しい。本井康博（1996）は、アメリカ人たちが実際に京都博覧会を観覧した様子や感想を含めて、京都博覧会とアメリカン・ボード宣教師と関わりについて論じている。

体裁について、長谷川奨悟（2012）は、覚馬名所案内が幕末の京都スタイルの名所記と寸法において一線を画している（28）、と述べ、森登（2013）は、覚馬名所案内が「当時としては非常に洒落た洋装本である（32）」と述べた。

京都博覧会の外国人対応については、京都府教育会（1940）に詳しい。日本政府からの通訳の派遣²⁾があり、京都府においても、通訳官を遠隔地からも招いた³⁾。また当時、欧学舎で言語を学んでいる学生は、外国人対応のため欠席しても差し支えない、という指令がでるほどで「博覧会中欧学舎の生徒は見物のため入京する西洋人の警護、通訳などの手伝いをしたものである（京都府教育会、1940: 387）」、という様子であった。

名所の選定と内容について、小嶋（2019）に、日本側文献の指摘がある。また、千代間（2021）には、明治初期に来日した西洋人は、鎖国中、鎖国以前に京都を訪れた西洋人の古い旅行記から、京都について共通の「観るべき名所」があり、それが覚馬名所案内にも影響した可能性を指摘した。

丹羽については、『慶應義塾出身名流列伝』（1909）に詳しい。

3. 新出史料の個々の解析

覚馬名所案内についての研究の多くは、青山霞村『改版増補山本覚馬伝』（1976、原著 1928年）を重要な基礎資料としている。しかし、青山が用いた参考

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景文献が不明であるため、研究には慎重さが必要である。

前述した新出史料の覚馬名所案内関係部分を抜き出し精査したところ、結果として、新情報や詳しい制作の状況が当事者の丹羽の言葉から明らかになった。このことにより、研究の信用性は高まったと思われる。

まず3つの重要な文献内の、該当部分を引用し、興味深い部分にアルファベットと下線(全て千代間による)を引き、説明と見解を加える。

①「博覧会の沿革」丹羽圭介講演

この講演記録は一般的な原稿用紙に書かれている。

今ここにガイドブックがありますから一つ御覧ください。これは私がまあ活版をさせて拵えたのです。初めて京都で活版の機械が出て来たりで、輪転機が来たので、ここに^aドイツ人の工学教師リントツレフ・レーマンによって端なくもこういうことを教えられて、その方針によって到底組立てが出来たのですが、ここにこれは博覧会がまあ単に・・・(ママ)博覧会が公に出版した何もかもが書いてある、こういうもので要するにこの明治6年は京都は大体的なやり方で、まあいわば御所は東京の方に御遷りになったけれども、これから遠く広く顧客を京都に集めて繁栄をさせようというのでございます。こういうのが京都の第一方策であった(24-25ページ)。

下線 a. の部分であるが、「リントツレフ」については、講演の際の書記が、丹羽の言葉を聞いたまま書いたと思われる。この文章は、ルドルフ・レーマンが、印刷技術の最先端である活版印刷機を使う提案、またその機械を使用した全く新しい書籍の制作手段の助言、そして印刷機の組立も実際に行った、とも受け取れる文章である。

②「京都と博覧会 丹羽圭介氏談」

この談話の書き取りは、大礼記録原稿用紙に書かれ、綴じられたものである。

その他銅版で京名所及博覧会の地図や英文の京都案内記(ガイドブック)を編纂出版したりして、それはそれは宣伝に努めたものであった。この出版に際しては、^b 府立集書院(今の図書館)用として、独乙から活字や印刷機械を購入し、^c 佛人ヂュリー氏の指導の下に、私が主任となって、

^d 山本覚馬氏の娘で、今の新島未亡人や私の妹など、英語女学校の生徒達

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景

が主として活字拾いの職工として働いた。これが明治6年(1873)で、京都に於いて外国文を活字に印刷出版した、そもそもの始まりで、⁶出版物は全て山本覚馬の名を以て出した。

下線 b.にあるように、出版、発行元は府立集書院⁴⁾(明治5年9月竣工⁵⁾)であった。「明治5年正月に府ですでに話があり、福沢諭吉氏が京都の学事視察をした時、『書籍縦覧株式会社開設』を勧め、府でいよいよこれを実現させる気運になった時、村上勘兵衛(青山、1976:96)」ら他3名が自ら運営したいと名乗り出た。集書院は実際に印刷の現場であったと思われるが、確実に裏付ける文献は現在の所見当たらない。

下線 c.には、フランス人教師のレオン・ヂュリーが指導した、という重要な新情報があった。ヂュリーに関しては、5-2に後述する。

下線 d.の、新島八重と丹羽の妹など、英語女学校の生徒達が主として活字拾いの職工として働いた、とする記述であるが、「八重と丹羽の妹」については青山霞村(1976)に良く知られていた。しかし、何を参考文献にしたかが不明であった。

この丹羽の言葉により、「京都と博覧会 丹羽圭介氏談」は、『山本覚馬伝』の参考文献であったと推定される。それを裏付ける1例として、山本八重を山本覚馬の娘、と青山(1976:99)は誤ったまま書いている。「京都と博覧会 丹羽圭介氏談」では、「娘」のところに後に、鉛筆で「妹」に訂正した様子がある(写真1)。

さて、新英学校及女紅場の女子生徒達が、職工の役割を担っていたことは新情報である。覚馬名所案内の制作には、女紅場の女子生徒たちの実際的な貢献があったことが、本調査で明らかになった。

山本八重は、明治5年4月に開かれた新英学校及女紅場の「権舎長兼教導試補(京都府教育会、1940:349)」であった。

丹羽圭介の妹については、「名前は英(ヒラ)、圭介の3年年下の1859(安政6)年生まれで、仲の良い兄妹であった。ヒラは平井権七⁶⁾に嫁ぎ、平井はのちにスポンサーとして、海外で開催された万国博覧会のための渡航資金援助など、丹羽を経済面から支えた⁷⁾」。

女紅場の生徒達は、「華族は勿論士族、医者、学者、儒者等の子女が主で、平

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 印 | こ | 是 | 別 | の | ガ |
| に | し | 馬 | 城 | 出 | ツ |
| に | こ | 氏 | 城 | 版 | ク |
| に | 活 | の | の | に | を |
| 外 | 字 | 娘 | 婚 | 際 | 締 |
| 國 | 拾 | 心 | 入 | し | 善 |
| 文 | の | 今 | し | こ | 出 |
| を | の | の | 佛 | は | 版 |
| 活 | 辭 | 新 | 人 | 社 | し |
| 字 | 工 | 島 | の | 主 | 右 |
| に | と | 本 | の | 集 | り |
| 印 | し | 亡 | り | を | し |

京都府立京都学・歴彩館所蔵。

写真1 「京都と博覧会 丹羽圭介氏談」原稿の一部 (○は千代間による)

民の女子は余り居らなかった (京都府教育会、1940: 348)」という生活環境にあり、職工として初めての作業に全力で取り組んだ様子がわかる。

下線 e. では、山本がこの全く初めてのガイドブック制作・発行事業について、全責任を負う人物であったことがわかる。

③ 丸尾長顕著 (1967) 『イヴの喫煙室』 「圭介翁聞き書」

丸尾は 1938 (昭和 13) 年 8 月 10 日に、京都の丹羽圭介宅を訪問し、聞き取りを行った。丸尾は、その時の丹羽の印象を「翁はそのとき、すでに 84 才で、美しい白髪、見事な白いひげが長く垂れ、温和だが、厳とした偉丈夫だった」と述べている。

外人も来るというので、英文の案内書 (ガイド・ブック) を印刷すること

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景

になりました。^f「これが日本で印刷された最初のガイド・ブックとなったのです。CELEBRATED PALACES (sic.) IN KYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES」と、いうものです。銅版画を貼った、なかなか苦心の案内書で、私が英文を書きました。

ドイツ語学校の^g「リュドルフ・レーマンの弟」が機械技師でしたので、当時、集書院（後の図書館）にあった輪転機を組立ててくれ、英文活字を^h「私や、私の師匠の山本覚馬の妹（後の同志社の新島襄夫人となる）が汗まみれになって文選したり植字した」ものです。この日本最初の英文ガイド・ブックはⁱ「3度も刷り直した」ものです（253-254 ページ）。

下線 f. の CELEBRATED PALACES (sic.) IN KYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES については、丹羽は自分の蔵書を丸尾に見せたと思われる。『京都府教育史・上』389 ページには「山本覚馬・丹羽圭介の京都案内（丹羽圭介氏蔵）」の表紙写真があり、「Kyoto⁸⁾」の他に、(&) の後に (.) がないだけで、丸尾の書き写したタイトルと同じである。

下線 g. には「リュドルフ・レーマンの弟」とあるが、正しくは、ルドルフは弟で、兄はカール・レーマン (Carl Lehmann) である。また「リュドルフ」は、青山の原著での言い方であり、『改版増補山本覚馬伝』では、ルドルフと改められていることから、この部分は丸尾が、青山の原著 (1928 年) に倣って書いたと思われる。

下線 h. の部分では、丹羽自身も印刷工員として働いた新情報である。

下線 i. の「3度刷り直した」点も新情報であるが、この言及が、覚馬名所案内の誕生までに、3度刷り直して完成したのか、それとも3回増刷を行ったのかは、不明である。

4. 結果：丹羽の視点による「覚馬名所案内の制作背景」新情報

丹羽の言葉である 3. で述べた新出史料の中から、得た情報を以下にまとめる。「ガイドブックを制作するにあたり、ルドルフ・レーマンは、すでに京都府が所有する印刷輪転機を使用し、画期的な書籍を制作することを助言した。制作はフランス人のレオン・デュリーが指導し、丹羽が主任となり、印刷輪転機の活字拾いは、丹羽自身、山本八重、丹羽英、並びに新英学校及女紅場の生徒達が職工

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文「京都とその近郊の名所案内」(1873)の詳細な制作背景となり、汗まみれになって覚馬名所案内を制作した。

覚馬名所案内の最初期のタイトルは、*CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES FOR THE FOREIGN VISITORS* である。銅版画の貼り付けも行った大変な苦心作で、完成までに3度刷り直した。出版については山本覚馬が著者として、全ての責任を負った。天皇遷都後の京都復興策は顧客を内外から集め産業を繁栄させよう、とするものであった。

5. 制作にかかわった京都府の雇い外国人たち

先述の覚馬名所案内制作に貢献した、西洋人たちについて述べると、彼らはもちろん、山本覚馬の友人で、京都の外国語教育と国際的な商業発展のためのブレンでもあった。また京都の教育界にとって、学生たちの面倒見も良く、京都府からも信頼され、重要な働きをした。

5-1 ルドルフ・レーマン

前述したように、カールとルドルフのレーマン兄弟については、兄・弟の記述に齟齬がみられるので、注意が必要である。また「ハルトマン・レーマン」は「レーマン・ハルトマン商会 (Lehmann, Hartmann & Co.)」⁹⁾である。

レーマン兄弟、またレーマン兄弟と山本覚馬のつながりであるが、竹内力雄(2019)、重久篤太郎(1968)に詳しい。「レーマン・ハルトマン商会は、貿易商社ではあったが、西洋の新知識の移植を計画した府藩県のお雇い外国人の供給源の役割もつとめて(重久篤太郎、1968: 141)」いた。

ルドルフは、1869年27才で来日し、レーマン・ハルトマン商会で働いた。ルドルフは兄カールと親しかった山本覚馬の仲介により、新設の外国学校の雇い教師として、1870(明治3)年京都に移った。ルドルフは英語も話し、最初の半年ほどは「英語、ドイツ語両語を教えた(ibid., 140)」。京都府教育会(1940)によると、ルドルフは、京都博覧会を授業の一環として「ドイツ学校の生徒を殆ど毎日連れて(387)」行き、文明開化の製品を実際に見せて、学生たちの教育に役立てた。

5-2 レオン・ヂュリー

レオン・ヂュリーについての詳細は宮本エイ子(1986)、重久篤太郎(1968)にある。

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景

デュリーはフランス語のほかには療病院にてラテン語を教えている。「おそらく彼は京都でラテン語を講義した最初の人であった(重久, 1968: 131)」。英語を解したかどうか、調査中である。「氏は生徒を公私にわたりよく指導し、そのため入学するものが相ついだ(重野安繹, 1899)。明治10年に帰国の際には「京都府では十余人を選抜しフランスへ随行させ、染色陶器製糸を学ばせることになり、氏にその監督を委託した。留学生は氏の尽力により大成して帰国した(ibid.)」、とあるように、学生からも慕われ、京都府からも信頼された。

6. 丹羽圭介の幼少から覚馬名所案内を制作した頃まで

丹羽の20才頃までについては、2. 先行研究で前述した、『慶応義塾出身名流列伝』(1909)が主な情報源である。この章では、丹羽の口述、家族に伝わる話から、丹羽の幼少から覚馬名所案内制作の頃までをまとめる。

丹羽は1856(安政3)年8月8日¹⁰⁾、山城国葛野郡壬生村(現在の京都市中京区壬生)に生まれた。父の名は桂芳、母の名は千代である。丹羽は3人目の子供であったが、長男長女は生まれてすぐに亡くなり、丹羽家14代目の「戸籍上長男(丹羽章, 2010: 3)」であった。丹羽は「壬生の寺侍の子(丸尾, 1967: 245)」であった。父桂芳は「これからは商売だ」、として寺侍は返納¹¹⁾した。丹羽家は、新撰組本陣の前にあった、壬生坊城通綾小路の八木喜間太¹²⁾の親戚であった(ibid., 246)。

丹羽は、幕末の騒々しい京都で幼少期を過ごした。蛤御門の変(西暦1864年8月20日、丹羽9才)では、御所が戦闘地となり、京都の町の大半が焼失した(ibid., 247)。丹羽も家族とともに避難した。その際、大小の刀を差してもらったが、重く刀が地面を引きずったので困った(ibid., 274)、とその時の思い出を語った。

圭介の受けた教育について、「幼少の頃は、庄田平五郎先生に漢字(ママ)を学び、更に同村の儒学者山本秀夫に教わり、論語を暗誦した(丹羽章, 2010: 3)」。庄田平五郎については、時代が前後するが似た苗字の人物がいる。『京都府教育史・上』によると、明治7年2月に京都に慶応義塾の分局が開かれ、「大分県人で長崎開成学校の出身である庄田平五郎が四月から授業を始めた(1940: 551)」とある。山本秀夫については、『山本亡羊先生小伝』によると、幕末に有

出版者丹羽圭介の視点による山本覺馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景
名な本草学者として知られた山本亡羊¹³⁾の子で、山本章夫の兄である。山本章
夫は、京都博覧会においても、品評会の品評方として知られている¹⁴⁾。

丹羽は自身の西洋人から受けた語学学習得について、以下のように述べている。

明治5年に府立の語学学校ができましたが、高田坊でフランス語はレオン・
ジュリー氏、いまの京都ホテルのところでドイツ語をリュドルフ・レーマ
ン氏が教えていました。英語は木屋町の角倉邸で米人ポーレン氏が主とし
て教えていたが、私も一度この門にはいりましたが、程度が低く、私は府
立牧牛場で米人ウィード氏について語学と農学を研究しました。これが酪
農研究所のはじまりです(丸尾、1967: 255)。

この言葉から、丹羽は自身の語学能力の向上のために、自分に適したネイティ
ブ・スピーカーの教師を求めて行動したことがわかる。

丹羽が師事した「ウィード氏」とは、米国人ウィード (James Austin Weed)
である。ウィードと「府立牧牛場」については、拝師暢彦(2005)に詳しい。拝
師(2005)によると、ウィード¹⁵⁾の来日もおそらく、レーマン・ハルトマン商
会の仲介があった。

丹羽はウィーン万国博覧会(開催期間は、1873年5月1日から10月31日)
について、「佐野常民大使が委員長で、私(圭介翁)も見学に行き(丸尾、1967:
256)」その際、精巧な東寺の塔の模型を出品した(ibid., 257)と述べている。こ
れらの発言については、調査中¹⁶⁾である。続いて丹羽は、「当時、私は東京へ旅
行しましたが、(中略)脇差を持ってゆけといわれたが、重くて包んでゆきまし
た(丸尾、1967: 257)」と述べた。この時の旅行についての詳細は、具体的には
わかっていない。

丹羽は同時期、京都において小野組転籍事件に関与した。青山(1976)による
と、その該当部分は、1873(明治6)年5月から8月までの間に「20才未満の白
面の書生丹羽圭介を知事代理として裁判所へやって申し渡しを受けさせた
(138)」ことである。小野組転籍事件は、1873(明治6)年8月に、山本が「京
都府参事榎村正直の東京拘禁に関してその釈放のため、妹八重に付き添われて上
京、(12月まで滞在、奏功する)(青山、1976: 405)」したことが知られている。

1874(明治7)年、18才の丹羽は東京の慶応義塾に入学するため、「母親より
金時計を持たされ、単身、徒歩で(千代間、2020年7月11日)」上京した。「肺

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景病を患って東京より戻った (ibid.)」との情報もあるが、詳しくはわからない。『京都府教育史・上』によると、京都慶應義塾は明治7年2月に授業が始まり、その年の9月に東京本塾に引き上げるようになったが、「同志社設立の1年前であり、新式私立学校の嚆矢と見てよい (1940: 551)」設立時期であった。生徒は「初め7人あったが、段々減って丹羽圭介と青地某の2人になった (ibid., 551)」。丹羽は明治10年に慶應義塾を卒業した。

丹羽は、山本が「明治13年3月、京都府会が開かれて初代議長に選ばれました。そのときは盲目のうえに、腰が立たず、私(圭介翁)が背負って壇上に運ぶという始末です(丸尾, 1967: 255-256)」という風に、慶應義塾卒業後京都に戻り、山本を支えるべく府議会の書記長として補佐した(三田商業研究会編, 1909: 150)。

7. まとめ

本稿では、制作・出版チーフを務めた丹羽の言葉と視点による新情報から、詳細な覚馬名所案内の制作背景への理解を深めようと試みた。結果を考察すると、著者すなわち責任者である山本覚馬の存在が大きく浮かび上がった。今回の調査において、山本はガイドブックの発案者のみならず、実際に彼のネットワークを十分に機能させて、迅速に覚馬名所案内が誕生するよう、より深く監督、指揮を行ったと考えたい。それは以下の理由からである。

第1には、ルドルフ・レーマン、レオン・ヂュリーという、山本の京都国際化戦略プレーンによる、深い関与が確認されたことである。山本は、京都博覧会の外国人参観者もてなしの手段について彼らと相談し、日本初の英文ガイドブックを作ることを思いついた可能性がある。活版印刷機は、特別な目的なく集書院で梱包されたままであったが、レーマンの進言により京都の文明開化を見せつけるために、従来の木版でなく当時最先端の活版印刷機を使用するという、画期的なアイデアを山本は採用して実行に移した。山本はレーマンとヂュリーに、丹羽の助けになってくれるよう依頼していたかもしれない。丹羽は印刷機の使用方法などについて、レーマンから実際に助言を受けたであろうし、ヂュリーは、丹羽から「指導を受けた」と述べられるほど、丹羽たちになんらかの指導や助言を行った可能性は高い。

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景

第2に、活字の文字拾いと解版についてであるが、山本が妹の山本八重に相談し、同時に丹羽も妹の丹羽英に相談したであろう。八重は、積極的に行動を起こして、自ら丹羽英と女紅場の生徒を引率し、印刷作業に貢献したと思われる。

新英学校及女紅場は、山本的女子教育の具現化であった。山本が1868年に明治新政府に提出した『管見』の「女学」の項には、新しい国家の人材育成は急務であり、女性の「性質にかなう学問芸術や政治に関わる分野を選んで、教えるべきである。そのうえ、才能のすぐれた女性にはさらに学問をさせるべきである(大島中正他訳、2020: 94)」と書かれている。この「性質にかなう学問芸術」とは、この場合何であろうか。覚馬名所案内制作においては、男子学生は屋外で、今日の学生国際通訳ボランティアの先駆けとして活動した。女子学生は、女紅場での針仕事の授業のように、屋内で印刷機と活字に向かい、全く初めて行う作業を根気強く行った、と考察することもできる。

覚馬名所案内初版発行後の銅版画を含む改版、鉄道の追補について、丹羽の関与の有無や状況は、今回の調査ではわからなかった。

京都府の外国人対応について、丹羽は「巡査悉くポリス(博覧会の沿革、1896か: 23)について語っている。「もし何か外国人が尋ねたいことがあったらどの人に聞く(中略)ポリスが悉く外国語を話せるはずはありそうなことではない、それで博覧会のどこそこの勧業まで連れて来てください」という、言葉のわからぬ時には、巡査はまず博覧会の通訳が駐在する事務室まで外国人を連れて行く、という京都博覧会の実際の対応システムの1つがわかった。

覚馬名所案内の、日本文、英文作成、名所選択については、京都駐在の通訳たち、また欧学舎の生徒たちの協力の可能性はあるが、丹羽の視点からはわからなかった。しかし、調査中に2点の気になる発見があった。1点目は、1873(明治6)年以降は山本章夫が一括管理した、山本読書室本家の伝来史料の中に、蘭書「ケンペル『日本誌』(1733)(松田清、2019: 163)」が蔵書としてあったことである。推測に過ぎないが、丹羽は西洋人が訪れた京都名所を山本読書室での勉学において認識する機会があり、それが名所選定に影響したかも知れない。2点目は、1. はじめに、で挙げた丹羽圭介著のディレクトリの京都の概要部分である。京都盆地を南北に流れる鴨川を縦線として、東を東山、西を西山と分けたこの区別方法は、覚馬名所案内の‘The City of Kiyoto’(1873: 3)(以下「京都の概要」)

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景項目の内容とよく似ており、明治初期の他のガイドブックには見られない独特な述べ方である。丹羽が覚馬名所案内の文章作成を行ったことを、裏付けるヒントがあるかもしれない。今後覚馬名所案内とディレクトリとの比較調査を行う予定である。

覚馬名所案内刊行の終了について、本調査により、新たに集書院が覚馬名所案内の発行元であったことが判明したので、明治15年2月の集書院の閉鎖¹⁷⁾に伴い、覚馬名所案内の刊行も終了した、と考える。

丹羽は、錚々たる研究者、教育者に師事し、京都府の御雇外国人教師たちとの深い異文化交流の機会に恵まれた。内外の博覧会との関係については、注16で示したように、山本秀夫、山本章夫は1873年のウィーン万国博覧会の事務局留守人員を務めた。福沢諭吉については、「博覧会という字が起こったのは、一番何によってかという福沢諭吉先生が慶応年間に、西洋事情というものを拵えられた、拵えられたのではない寧ろ翻訳された(博覧会の沿革、1896か:2)」と、丹羽は聴衆に向けて述べた。山本覚馬は「京都が日本最初の博覧会を開き、万国博覧会にも熱心に殊に当たったので、山本覚馬先生にもっとも知遇をうけた京都の丹羽圭介氏が後年政府から派遣されて万国博覧会の事務に当るに至った(青山、1976:119)」とあるように、若き日の丹羽を自分の近くに置いて指導し、強い師弟関係を築いた。それは幕末の騒乱の中、家族で市中を逃げ惑った丹羽の、「京都が丸焼けになり(中略)京都の旧家では会津藩を根強く怨んでいるのです(丸尾、1967:250)」という感情を超越させるものであった。丹羽は山本の期待に応じて、覚馬名所案内を完成させ、同じく丹羽英も、自分の師である八重に応じて、自分に出来ることを一所懸命行なった。

丹羽のその後の活躍は、多岐にわたる¹⁸⁾。丹羽はインタビューの中で、2度も若い頃の帯刀の思い出を述べたように、侍であったプライドも持ち続けながら、国際人としての教養と、コミュニケーション・ツールである英語を流暢に使いこなす、人的ネットワークを強固にして、「京都美術工芸界の官民学(並木誠士他(編)、2017:240)」を繋いだ。丹羽について今後も調査を続けるつもりである。

丹羽圭介曾孫の丹羽章様に、インタビューの協力をいただき、貴重な史料の提供を受けました。深く感謝申し上げます。

注

- 1) 覚馬名所案内は略称であるので、[] は用いないこととする。
- 2) 「常時外国事務に敏腕の聞こえ高かった楠本正隆氏に対し京都へ出張をめいじている(大槻喬、1937: 29)」。
- 3) 「長崎、足羽(現福井県の一部)、豊岡(現兵庫県の一部)、宇和島(現愛媛県の一部)、広島
- の諸県より通訳官8名を招いて3会場へ分置し、大阪府よりは井上典事、山田権少属、川原四等訳官、兵庫県より芦原権大属らが出張し、交代して外国人の応対に当たった。尚兵庫県では京都府の依頼に応じ左の訳官が10日交代を以て出張した(大槻喬、1937: 29)」、という対応であった。
- 4) 府立集書院については、青山(1976)に詳しい。
- 5) 京都市(1975)『京都の歴史8』学芸書林、275ページ。
- 6) 英の夫、平井権七は6代目と思われる。「平井家は亀甲屋の屋号を持ち、江戸時代からのポンプの製造販売を業とし、明治維新までは御所および諸藩の御用商人も勤む。維新後は金銭貸付業も兼ね、多額納税者として明治37年には府下第3位を占む(京都商工会議所、1985: 545)」ほどであった。
- 7) 千代間泉(2020年7月11日)「丹羽章氏面談採録」。
- 8) 丹羽圭介氏蔵はKiyotoである。丸尾は現代語に書きなおしたと思われる。
- 9) 重久篤太郎(1968)『お雇い外国人⑤教育・宗教』139ページ。
- 10) 和暦であるとする、西暦では1856年9月6日生れである。
- 11) 千代間(2020年7月11日)「丹羽章氏面談採録」。
- 12) 八木家10代目当主である。
- 13) 山本亡羊は、「文政9年ドイツの名医本草学者シイボルト氏我国へ漫遊し長崎より京都に來り河原町二条阿蘭陀屋敷に逗留中慶先生と往復し我国と欧州諸国の物産薬品を相互に比較研究し(中島民之介、1909: 19)」交流を深めた研究者であった。
- 14) 品評員の氏名の記録が整う、1875(明治8)年の第4回京都博覧会から、品評方として名前がある。大槻喬(1937)『京都博覧協会史略』京都博覧協会、64ページ。
- 15) 1827年生まれのウィードは、明治6年から年ごとに契約を更新し、12年4月末日まで6年間、継続・雇用された。
- 16) 坂本久子(2008)の研究に、ウィーン万国博覧会に公的に派遣された人員の名簿があるが、丹羽の名前はない。私的な渡航については調査中である。参考までに、澳国博覧会事務局留守人員表(坂本久子、2008: 3)の中には、丹羽の師である、山本章夫の名前がある。
- 17) 京都市(1975)『京都の歴史8』学芸書林、275ページ。
- 18) 例えば、並木誠士他編(2017)『京都近代美術工芸のネットワーク』思文閣出版、に詳しい。

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景

参考文献

- 青山霞村 (1976) 『改訂増補山本覚馬傳』(原著 1928年) 住谷悦治校閲、京都ライトハウス。
- 大島中正、ジュリエット・カーペンター、枝澤康代、坂本清音、杉野徹 (訳) (2020) 『山本覚馬建白「管見」— 釈文、訓み下し文、現代語訳、英語訳 —』同志社女子大学史料センター。
- 大槻喬 (1937) 『京都博覧協会史略』京都博覧協会。
- 京都市 (1975) 『京都の歴史 8』学芸書林。
- 京都市 (2003-2015) 「レオン・ジュリー碑 碑文の大意」 https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/fmindex/jinbutsu_frame.html 最終閲覧 2021年1月28日。
- 京都商業会議所百年史編纂委員会 (編) (1985) 『京都経済の百年』京都商工会議所。
- 京都府教育会 (1940) 『京都府教育史・上』。
- 工藤泰子 (2009) 「明治初期京都の博覧会と観光」『京都光華女子大学研究紀要』第46号、77-100ページ。
- 小嶋正亮 (2019) 「英文京都案内『CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES FOR THE FOREIGN VISITORS』について」『宇治市歴史資料館年報平成29年度』1-33ページ。
- 坂本久子 (2008) 「日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会とウィーン万国博覧会の関連」『近畿大学九州短期大学研究紀要』第38号、1-15ページ。
- 重野安繹 (1899) レオン・ヂュリー碑 「碑文の大意」。
- 重久篤太郎 (1968) 『お雇い外国人⑤教育・宗教』鹿島研究所出版会。
- 千代間泉 (2020) 「日本初の英文京都ガイドブックの制作背景と改訂についての研究」『日本国際観光学会論文集』第27号、63-71ページ。
- 千代間泉 (2020年7月11日) 「丹羽章氏面談採録」。
- 千代間泉 (2021) 「Keelingの *Tourists' Guide* (1880) についての研究 — 山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)、京都博覧会と古い西洋人旅行記の影響 —」『日本国際観光学会論文集』第28号、59-69ページ。
- 中島民之介 (1909) 『山本亡羊先生小伝』奮京都博物会。 https://books.google.co.jp/books?id=yK61KDJzB6sC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbv_atb#v=onepage&q&f=false 最終閲覧 2021年2月12日。
- 並木誠士、青木美保子 (編) (2017) 『京都 近代美術工芸のネットワーク』思文閣出版。
- 丹羽章 (2010) 『三橋写真』。
- 拝師暢彦 (2005) 『御雇外国人 J. A. Weed の六年間 — 京都府農牧学校物語 —』京都新聞出版センター。
- 博覧会の沿革 (1896か) 「京都と博覧会丹羽圭介氏談」「丹羽圭介講演録」博覧会関係資

出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)の詳細な制作背景

料、博古 313-7、京都府立京都学・歴史館所蔵。

長谷川奨悟 (2012) 「明治前期の名所案内記にみる京名所についての考察」『歴史地理学』
54-4 (261) 24-45 ページ。

松田清 (2019) 『京の学塾山本読書室の世界』京都新聞出版センター。

丸尾長頭 (1967) 『イヅの喫煙室』立花書房、253-254 ページ。

丸山宏 (1986) 「明治初期の京都博覧会」『万国博覧会の研究』思文閣出版。

三田商業研究会編 (1909) 『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社。国会図書館デジタル
コレクション。DOI: 10.11501/777715 最終閲覧 2021 年 2 月 12 日。

宮本エイ子 (1986) 「京都ふらんす事始め」 http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/history/kyoto_france.htm 最終閲覧 2021 年 1 月 28 日。

本井康博 (1996) 「京都博覧会とアメリカン・ボード — 京都ステーション (同志社) への道 —」『同志社大学 キリスト教社会問題研究』第 45 号、100-139 ページ。

森 登 (2013) 「銅・石版画万華鏡 65 山本覚馬『京都名所案内』」日本古書通信第 1002 号、
32 ページ。

Niwa, K. (1913). *A Directory of Kyoto and Its Traders. (3rd.ed.)*. The Kyoto Commercial
Museum.

Yamamoto, K. (1873). *Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Countries for the
Foreign Visitors*, Niwa.

Yamamoto, K. (1873). *The Guide to the Celebrated Places in kiyoto & the Surrounding
Places*, Niwa.